

第一學年乃至第三學年 每週一時

生徒心得

教育ニ關スル勅語 戊申詔書 國民精神作興ニ關スル詔書 道德ノ要領

修養

攝生 身體ノ鍛鍊

修學 修德

家生活

家 祖先 孝行 夫婦 友愛 親族等

社會生活

協同 公正 寬容 同情 公益 秩序 責任 禮儀 職業等

國家生活

國體 天皇 皇室 忠君愛國 國憲國法

國際生活

國際親善 國際協力 外國人ニ對スル禮儀・交際

作法

第四學年及第五學年 每週一時

道德ノ原理

良心 行爲 品性 至善 本務 德 人格

社會生活ノ原理

社會ノ成立及組織 社會ノ作用

國民道德

我が國道德ノ由來

教育ニ關スル勅語發布ノ由來

教育ニ關スル勅語ノ精神

時代思想ノ批判

作法

注意

一、修身教授ノ效ヲ收メントスルニハ特ニ訓練ニ依リテ生徒ヲ實行ニ導キ人格的感化ヲ及ボサンコ

トニカムベシ

二、修身ノ教授ハ生徒ノ思想年齢ニ適應セシメ又努メテ實際生活ニ適切ナラシメンコトヲ要ス

三、作法ヲ教授スルニハ克ク其ノ精神ノ存スル所ヲ知ラシメ應用宜シキヲ得シメンコトヲ要ス 但

シ之ヲ授クルニハ特ニ時間ヲ設ケズシテ道德ノ要領ヲ授クル際便宜併セ課スルモ可ナリ

四、教育ニ資スベキ事件ノ偶發シタル時又ハ國民ノ記念スベキ日及忠良賢哲ノ記念日等ニ於テハ適

宜教訓スルヲ可トス

公民科

本要目ハ法制經濟及社會上ノ事項ニ關シ日常生活ノ關係ヨリ其ノ教材ヲ排列シ常ニ實踐上ノ問題ニ歸結セノメンコトヲ期セリ

教材中我が家・我が郷土・我が府縣・我が國家等ノ題目ヲ選ビタルハ生徒ノ親熟シタル日常生活ノ事項トシテ之ヲ取扱ハンガ爲ナリ。

第四學年 每週二時

人ト社會

人ト社會 共同生活ト共存共榮 國家ノ重要意義

我が家

家庭生活 我が國ノ家族制度 戶主 家族 親族 婚姻 戶籍 相續

一家ノ生計

一家ノ收入 生計費 勤儉貯蓄 保險 財產

職業

職業ト人生 職業ノ選擇 勤勞ト研究 職業ト道德

教育

人ト教育 家庭教育 學校教育 義務教育 社會教育

社會教育ヲ教授スル際新聞雜誌等ノ事項ニ説キ及ブベシ

神社

神社 敬神崇祖

宗教

宗教 信教ノ自由

公安

警察ト公衆 災害防止 公衆衛生

地方自治

地方自治ノ沿革 地方自治ノ精神 我ガ郷土

我ガ郷土ヲ教授スル際愛郷愛國ノ事ニ説キ及ブベシ

市町村

市町村ノ自治 公民 議員ノ選舉 市町村會 市役所 町村役場 市町村ノ財政 市町村ノ財産

府縣

府縣ノ自治 府縣廳 我ガ府縣

農村ト都市

農村ト都市 農村生活 農村ノ開發 都市ノ生活 都市ノ改善

産業

産業ト國民經濟 農業 工業 商業 其ノ他ノ産業

農業 工業 商業等ノ任務 要素 企業形態 産業組合 産業助成機關等ニ説キ及ブベシ

貨幣及金融

貨幣 物價 信用 金融機關

交通

交通機關 交通ト文化

交通道德ノ事ニ説キ及ブベシ

第五學年 每週二時

國家

人類ト國家國家ノ要素、國體ト政體、我ガ國家

皇室ト臣民

天皇 皇位繼承 皇室典範 皇室及皇族 皇室ト臣民天皇ヲ教授スル際詔勅ノ事ニ説キ及ブベシ

立憲政治

立憲政治 帝國憲法 臣民ノ權利義務

帝國議會

帝國議會 議員ノ選舉議會ノ作用 政黨

國務大臣 樞密顧問

國務大臣 內閣 樞密顧問
 行政官廳
 行政官廳 行政官廳ノ種類 官吏
 國 法
 國法 國法ノ種類 法ノ尊重 法ト道德
 裁判所
 司法 裁判所 訴訟 調停 陪審
 國 防
 國防 兵役 我ガ國ノ軍備 國防ト國民
 國 交
 國交 條約 國際協同 國交ト國民
 財 政
 歲入ト歲出 租稅 官業 公債
 我ガ國ノ産業

我ガ國ノ産業 我ガ國ノ貿易 資源ノ開發
 人口ト國土
 人口ト國土 拓殖ト移住 海外發展
 人口ト國土ノ教授ノ際我ガ領土、租借地、委任統治ノ地域等ノ事ニ説キ及ブベシ
 社會改善
 社會問題 社會政策 社會事業 社會改善
 世外ト日本
 人類文化ノ發達 文化史上ノ我ガ國ノ地位 我ガ國ノ使命
 注 意
 一、公民科ノ教授ハ事例ヲ成ルベク日常生活ニ於ケル經驗ニ求メ理論ニ偏セズシテ實際ヲ主トシ且
 道德的情操ノ陶冶ニ力メ特ニ修身トノ聯絡ニ留意スベシ
 二、本要目ハ土地ノ情況等ニ應ジ適宜斟酌シテ運用スベシ

一一 中學修身書教授參考書の自序

著者は多年實際教育に於ける經驗と研究とに基づいて、大正十三年に中等教育女子修身書を著して、平素修身科に就いて懷抱してゐた所見を發表した。當時續いて中學修身書と實業修身書とを著す意圖を有つてゐた。然るに之に着手するに至らぬ中に、翌年五月突然蘇格蘭エチンバラに開催される國際教育會議に政府の代表として參列の命を受け、急遽宮崎丸で日本を出發することになった。而かも著者の光榮ある記念となつたのは、秩父宮殿下と御同船申上たことである。尙ほ此の序を以て我が日本赤十字社の委嘱を受け、同社の委員として佛國巴里に開催される少年赤十字國際教育家會議にも參列することになった。少年赤十字の會議は日程が繰上がつて巴里到着の翌日から開會になつたので、やつとの事に間に合つた。エデンバラの會議は其後約二週間で開會になつた。著者は此二種の國際會議に列席して深く腦裡に印象したのは、歐洲大戰後國際間に漲つて居る人道氣分である。此事は新聞雜誌や著書等の上で、出發前にも我が國に居ながら充分に承知してゐた事であるが、自分自身に日本の代表として斯かる大規模の世界的運動に参加して見れば、全く別

種の感激が起る。丁度寫眞や繪で見ると生きた人間に面接するのとの差異を感ぜざるを得ぬのである。人道の理想は廣く世界の現代人を動かしたつゝある文化生活の根本思想である。これは決して思想家や樂天家の空想に止まるものではなく、着々國際事業と成つて其理想實現の歩武を進めつつある。これは當さに東西を風靡する世界の犬勢と言ふべきである。

茲に忘れてならぬことは世界各國が相協同して國際聯盟の精神に基いて協力互助、人道の理想を實現しようとしてゐると同時に、其の根柢には熱烈なる愛國心即ち民族的精神が燃えてゐることである。偏狹な愛國心や國家主義は往々にして人道の公敵となるが、眞正の愛國心は人道主義と決して矛盾することがないといふ力強い確信が、人道的事業を進めて行く根柢をなしてゐることは餘りに明白な事實である。

自國を愛せず又自國の獨立を確保することの出來ぬものが、人道的國際事業に盡すといふことは僭越且不合理至極である。世界的人道的の國際事業に盡力する人々は最も正しい意義に於ける愛國者であり、且つ自己の所屬する民族に忠實なる人々である。國家主義と人道主義とは相對抗し相反對するものゝやうに、我が國では嘗て世上に議論された時代もあつたが、著者が上記二個の國際會議で明確に體驗し得た心證によれば、此の二者は今や事實上最も合理的に會通し相調和されて現代

人を支配しつゝある。著者自身が年來理想として抱いて居た人道的國家主義は生きた主義として歐米列強の思想家の心裡に活躍してゐるのを體驗し得た。

著者は曩に大戰直前明治四十一年より四十五年まで獨逸の全盛時代に海外留學をしてゐたので、一度親しく戦後の獨逸の現状を目撃して戦前戦後の比較を試みることは兼ねての熱望であつたが、今回の外遊は圖らず此希望を達する好機會となつた。エヂンバラ會議終了約二箇月英國に滞在し更に二ヶ月佛國を視察してから欣喜雀躍して獨逸に赴いた。

先年留學の際日本から初めて伯林に着いてから、丁度十七年目に、佛國巴里から同じ伯林のフリドリツヒ街中央停車場に着いた時には、往年新來當時の感想がむらむらと胸中に湧いて來て感慨無量であつた。

十七年前の獨逸は軍閥全盛時代で全國が恰も一個の大規模な機械であるかの如く、カイゼルの一令の下に手足の様に動いて、國運隆々として進み國民には上下を通じて旺盛な元氣と意氣込が充滿してゐた。王宮の側の堂々たる大寺院も帝國議會も建築落成後僅かに數年に過ぎなかつた。然るに此度戦後の獨逸に行つて見れば、戦前とは大違ひで、軍閥が失脚して列國と屈辱の講和を結び虐待を甘受せねばならず、列國の強硬な壓迫で最早手も足も出せぬといふ有様である。併し大戰後諸種の

報道や歸朝者の直話等から綜合して想像に描いてゐた獨逸の慘狀は實地に目撃した現状とは餘程遠かつた。率直に言へば、伯林に着くまではまだまだひどいだらうと思つてゐた。換言すれば獨逸は非常の勢ひで最近に復興しつゝあるのである。始めて日本から獨逸に行つて戦前の獨逸を知らぬ人は、獨逸の現状と我國の現状とを比較して寧ろ獨逸の盛況に驚く事が多い位である。併し戦前の盛況を知つてゐる自分の眼に映じた伯林の現状は、餘程回復したとは言へ、一種の悲哀を催さずには居られなかつた。往來を行く人の服裝が著しく粗末になり、殊に婦人の服裝などは中流以上の人も最早流行は存在しないと云つてよい程貧弱である。盛り場と言はれた目抜き通りも、著しくさびれて通行人も何處となく元氣が無い。大商店や料理店も客が少く商品は貧弱になつた。往來の電燈や自動車は餘程少いやうに感じたので、古くから居る人に聞いて見た所が戦前の七割位までに回復したさうである。而かもそれは過去約一年位の間に、昨今は面目一新と言つてもよいさうである。戦前と同じ状態に達するまでにはまだ數年を要するであらう。併し此復興は獨逸の戦後の世界に於ける地位から考へれば實に驚くべきものと言はねばならぬ。我等は此の破天荒の復興を目撃する時に其の背後に潜んでゐる力強い原動力に思ひ及ばぬ譯には行かぬ。まだ生き残つて居た舊友の獨逸人から詳細な事情を聞いて一層此感じを強くした。尙ほ獨逸に約二箇月滞在して各地を視察し

たが最も深刻に著者の印象に残つたのは上述の速かな復興を來した背後の力強いあるもの即ち國民の復興精神である。此の精神は言ふ迄もなく獨逸國民に傳統的な所謂獨逸魂である。獨逸には最早徴兵制度は無くなつた。併し之に代るべき國防の實力は小學校を出發點として上は大學に至るまで各種の學校に於て又學校以外には有志の團體によつて極めて組織的に養成されつゝある。

獨逸の財政は窮乏の極を示し學校官廳至る所に經費缺乏の聲を聞かぬ所は無い。併し窮すれば通ずるものである。戦時中困苦に鍛鍊された獨逸人は背に腹は代へられぬ必要に迫られて經費窮乏の中に必要な事々は着々として實行してゐる。教育も學術の研究も實際を見れば經費窮乏中によくもあれ程に遣れるものかと思ふことをやつてゐるのには敬服の外は無い。

戦前の大學生中にはビールを飲み遊んで暮す氣樂者も多かつたが、戦後は學生の風紀が全體に引締まり、此種の學生は最早其の跡を絶つて、いづれも全力を學業に注いで眞劍に祖國復興の途に進してゐる。其の意氣込はすばらしいものである。著者は外遊前には獨逸は革命と共に帝國が亡びて共和國となり政治上社會上の大變動を來し社會主義が勢力を得たので、社會は往時の秩序を失つたので無いかと云ふ疑問を抱き殊に新舊思想の關係について著者は多大の興味を持つてゐたが、結局獨逸の國民は上下如何なる人も目下祖國が存亡の危機に迫つてゐることを自覺し、此死地を脱し

て活路を求むる途は父祖傳來の獨逸魂によつて根強く奮勵努力するより外には決して無いと云ふことが舉國一致の徹底した確信である。今や政治、經濟、教育、藝術等あらゆる祖國文化の進展は此の民族精神に其の源動力を見出してゐる。

獨逸人は戦後自暴自棄となつて意氣銷沈してゐるといふやうな觀察は極めて皮相淺薄のものに過ぎぬ。獨逸人は祖國文化の退歩を悠々閑々として拱手傍觀するやうな氣樂な國民ではない。如上の印象は滯歐中絶えず著者の胸中に往來して無量の感慨を喚び起し外遊前から豫定してゐた著述の腹案に多方面の材料を供給した。

著者は同年嚴冬白雪を踏んで獨逸から北歐丁抹の國民高等學校の視察に行つて熱烈の愛國者ゲルンドゥイツヒの偉業を偲び英國倫敦の客舎に歸つて三日目に街路歩行の際突然腦溢血を起し直に附近の病院に收容された。時に大正十四年十二月十三日午後十時で、最早渡米の乗船切符を買つて英國を出發しようとする十日前であつた。病氣は割合に軽く病院は九日間で退院し渡米の豫定を變更して翌年一月二日日本郵船會社の伏見丸で倫敦を出發し印度經由で歸朝の途に上つた。

四十九日間の航海は身體不自由の著者には實に寂寞無聊の極であつた。病院も船室も一種の牢獄のやうに感ぜられた。此の思想が浮ぶ度に先哲の獄中生活を聯想した。殊に發病後九日間入院中は

身體の自由を失ひ何一つ自分で用事が出来ず毎朝眼を覺ます度に起る第一の感想は今日もまだ生きて居るといふ事であつた。斯く生死の間を往來した自分には生死の問題につき又人生の意義に就いて深刻な考察を下さぬ譯には行かなかつた。若い時分から今日までに作り上げて居た人生觀や生死の覺悟を今一度練り直した。五十年の過去は夢幻と消え去つて航海中は一度は既に濟んで仕舞つた。生涯の後に餘分の生活を空中に送つて居るやうな氣がした。随つて其の間に一度も悲觀の極、死の恐怖に襲はれたことは無かつた。加之祖國に近づくに従つて心身共に恢復して元の通りに恢復するのが當然のやうに思はれて來た。一度死んだものと思へば誠に氣易いものである。

二月十八日に神戸に着いた時に家族や親戚は孰れも想像してゐたよりも病態が重いのに驚いた。それは發病以來右手が自由に利き氣分はよいので絶えず恢復の狀況を通信してゐたからである。日本に歸つて見れば醫師は養生に就いてやかましい注文をした。肉食をするな。刺戟性の食物を取るな。可成野菜を食べよ。絶對安靜を理想とせよ。精神的にも肉體的にも努力といふ事を一切するな。危険な重病といふ事を一日も忘れるな。旅行や書見や著述や講演は大禁物である。といふ事である。腦溢血の治療法としては至極御尤である。併し平素何もせずじつとしてゐられぬ性分の著者には此上もない苦痛である。殊に頭腦で生活してゐる著者には頭腦を使ふなといふことは宛然死

刑の宣告と同様である。醫師の警告に拘らず毎日床を敷いて置きながら晝間には三十分間と連續して就寤した事はなかつた。歸朝早々學年末ではあり、日々多忙な學校の事務も出来る丈け自分で處理した。

其の後次第に快復して五六月頃には著しく氣分もよくなり氣力も生じて來たのと書肆の希望もあり兼ねて構想中の著述に著手しようと思つた。閑居無爲に其の目を暮す位なら生きてゐる價値は無いと思つた。病氣が病氣であるから何時再發するかも知れず、著述の完成には多大の杞憂を抱いて居たが既に女子修身書といふ基礎が出来て居るから之を添削すれば出来ると思つた。加之道徳は本來男子女子と標準が二様にある譯では無いから、女子修身書に訂正すべき事を自分に鉛筆で書き入れ新材料は別の紙に同じく鉛筆で書加へて清書を他人に頼んだ。これは左手が利かぬ不自由を救ふ便法と考へたからである。醫師の警告で病氣再發の危険を知りつゝ飛んで火に入る夏の蟲の愚に倣ふには忍びぬから、心身共に過勞にならぬ程度に仕事を進めた。かくして十月末までに中學修身書五卷を脱稿し且其印刷を終つた。

卷四の半ば頃を書いてゐる時少し頭が痛んで來たので、とても完成は出来まいと思つたが四五日靜養して又恢復したので繼續することが出来た。實業修身書は中學修身書を基礎として實業教育に

適切な事項を加へた。これも女子修身書と中學修身書と根本が同じであるやうに中學校の修身と實業學校の修身とは同一の標準であるべきものといふ考へからである。道德は世界萬人の公道で所謂實業道德といふやうなものが普通の道德以外に存在する筈は無い。天地の公道、人倫の常經たる人道が實業に行はれるのが實業道德ではなからうか。實業修身書は十二月中に脱稿した。

其後に此の教授參考書の編纂に着手したが其の間に發病後滿一年を經過し氣分も氣力も著しく恢復したので此の原稿は自分で萬年筆を用ひて書いた位で、著述が病氣に障るといふ心配は殆んど無くなつて來た。併し孰れも左手を用ひず右手のみの片手仕事である。

中學修身書と實業修身書とは固より遺憾なく著者の所見を盡したといふことは出來ぬ、不十分の所は何處までも將來に修正する豫定である、尙ほ此の教師用參考書も完備とは言はれぬ。併し編纂中に絶えず胸中に往來した感想は古への聖賢や先哲が今日の社會と同一の問題に就いて深刻な考察を下し且つ適切な教訓を残して居ることである。即ち古人の格言や教訓中には千歳不朽の價值が存してゐることである。著者は本書の編纂によつて自己の思想を豊富にし且つ大に修養に資したことを感謝してゐる。後日此書を繕く時には著者には又他の人に知れぬ感想が伴ふであらうと思ふ。

外遊中の發病は著者の一生涯の進路に於ける一大頓挫には相違ない。併し道の爲に斃れる事は著

者の辭する所では無いので、天を怨み人を怨む心は毛頭無い。唯此の外遊によつて一方には多年の素志を遂げ、戦後の歐洲に於て得難き體驗をなし、此等に基いて不完全ながら短時日の間に二書を著はすことが出來たのは全く外遊と腦溢血との賜物であり記念であり、外遊も病氣も共に無益でなかつたことを衷心から感謝してゐる。且つ病氣の爲に身體は不自由になつたが、幸にして頭腦には故障が無く、却つて世俗の煩累を避けて専心沈思黙考することが出來たことを感謝する。

病中に此著述をせねば或は恢復が今少し早かつたかとも思はれる。併し著者自身としては無爲閑居して徒らに無意義無價値の馬齡を加へるよりも、多少生命を縮めても會心の仕事をする方が勿論満足である。

若し著者が外遊もせず重病にも罹らなかつたとすれば、此二書は著はしたかも知れぬが、其の内容は多少趣を異にしたであらう。著者は齡五十を過ぎてゐるから假令健康であつても餘命は最早幾許もない。殊に腦溢血後の命數に就ては十分の覺悟を定めてゐるから、最早何時死んでも毫も遺憾はない。此書は誠に粗末ながら此世への置き土産である。著者の精神が拙著を通して多少にでも我が國の青年の心裡に印象されるなれば、著者の病中の努力は永遠に酬いられるではないか。夫れ丈でも著者は死して悔ゆる所が無いと思ふ。以上の述懐を以て本書の序に代へるのである。(昭和二年

三月中旬識

五九八

三 更生 五年

私は大正十四年十二月十三日海外出張中英國倫敦の街頭で突然腦溢血を起し、九死に一生を拾ひ得てから昭和五年十二月既に滿五周年を經過して、茲に更生第六年を迎へてゐる。私は倫敦街頭の發病を更生の機會と思ひ十二月十三日を更生記念日と定め、世人が誕生日を祝すると同じ意味で毎年此の日にさゝやかな心ばかりの内祝宴を開き記念撮影をしてゐる。更生と言へば如何にも面白い花やかな新生涯でも展開してゐるかのやうに聞えるが、露骨に言へば實は命拾ひの喜びを記念するに過ぎぬ。

人生五十を世間並の定命とすれば大正十四年數へ年五十二歳を一期として頓死したからとて殊更に人に惜まれる程でもなく、自分に惜しいと思ふ程でもなかつた。否寧ろ其の時に頓死してゐた方が却つてサツパリしてゐたかも知れぬ。併し人間は誰も死を好むものでない。折角二度とない生命を此の世に受けたからは、一日でも長く、生き延びたいと願ふのが詐らざる欲求であらう。されば

とて、命あつての物種をモットーとして何程生きたいとわめき叫んでも壽命が盡きて死んでしまへばどうにもこうにも仕方がない。人間の生死は誰が何と言つても個人の自由意志を超越してゐる。私も當夜邦人の同行者がなく、倒れる所を抱き止めて貰へず、倒れる勢で頭をゴーンとサイド・ウォークの敷石の上に撲ちつけ、又通りがかりの人や警官の介抱を受けず行き倒れのまま、折しも凜烈であつた寒風に吹き曝されてゐたとすれば、私の慘死は確實であつた。この事を思ひ起せば今日の餘命は全くの拾ひ物同様である。之を思へば思ふ程たつた一日でも生き延びてゐる有り難さがひし／＼と身にしみる。老いぼれ中氣患者のみじめな姿や浪人生活のわびしさの如きは異郷行き倒れの頓死に比へては物の數にもはいるものでない。

丁酉倫理會倫理講演集昭和二年十二月號に掲げた「生死の境に立ちて」の一篇（昭和四年刊行の拙著現代教育概観卷末附録に收む）は同年八月大阪高等學校長を辭して間もなく記した發病以後辭職に至るまで體驗の詐なき告白である。而かもそれは發病後雜誌に筆を執つた最初であつた。平素醫師の注意もあり、頭腦を使ふ仕事は午前中に限り、午後と夜とは絶對的に休養する事にしてゐた。随つて彼の體驗記を書く時も成るべく熱中せぬやうに、少しづつゆる／＼筆を進め、原稿紙十枚位ですます豫定であつたが、いざ筆を執つて書きかけて見れば、當時の感想がむら／＼と湧き出

で、二日で書き切れず三日目は今少しで書き終るといふ考へが先きに立つて思はず調子に乗り急速度にペンを走らせ正午を忘れ晝食の案内を顧みず、書き終つて原稿紙を數へて見れば無慮七十枚を超えて、時計は午後二時を過ぎてゐた。仕事の完結は愉快であつたが醫師の注意を忘れた結果は靦面に表はれて顔は熱くほてつて頭は上ほせ氣味であつた。それから夕刻まで頭は依然書いた事で一杯になつて萬感交々至つて平靜に歸ることが出来なかつた。其の夜は無論安眠が出来ず、引續き三日間といふものは疲勞の餘波が消え去らなかつた。夫れから今日まで滿三年の月日が匆々として流れ去つた。誰しも自分の事は何でも善い方善い方に解釋しようとする勝手な自惚心を有つてゐるから病氣でも本人は醫者や他人が思つてゐるよりも遙かに早く全快するものと信じてゐる。否切言すれば病氣は本人に平癒の自信がなければ實際に平癒が困難であるから、治療の手段として難治の重病も本人には成るべく悲觀させぬやうにする事は必ずしも醫學の知識を待たずとも常識で一般に實行してゐる所である。有り體に言へば私も倫敦出發の際には神戸着の頃には全快するといつた醫師の言を信じてゐたが四十九日の航海を終つて神戸に上陸する時には、そんなに早く全治するものではないといふ覺悟が出来た。それから半年經つて全治せず一年經つても二年經つても全治の時は來ず、慢性中風の意義が如實に了解された。併し振り返つて見れば發病後過去六年間は實に遅々た

るものであつたが絶えず徐々として確かに氣力を恢復してゐる。昨日今日を比較しては恢復の程度は少しも分らぬが半年前一年前と相當の時期を隔て、比較すれば恢復の跡が判然と分る。これは往々久し振りに訪問して來る人の觀察で證明される。發病當時と神戸上陸當時と、神戸上陸當時と退職當時と、退職當時と昨今とを追想比較すれば殆んど別人の感がある。私は一度は死線を越え、何時再發するかも分らぬといふ生死の境を往來してゐたが、昨今では一寸見ても病人と思ふ人はない位で最早死線を忘れて餘生、否、更生を楽しんでゐる。

腦溢血で死に損つた中風患者には閑雲野鶴を友として悠々自適の生活を送る方が少しでも餘命を長く延ばすには最も安全な途であることは、醫學上からも、常識上からも何等議論の餘地はあるまい。此の見地から言へば、私が發病後間もなく歸朝して一年半も在職して不完全ながらも校務に従事してゐたことは明かに無理であつた。殊に退職後山野に歸臥せず、大都市塵埃雜沓の巷、而かも電車通に住居してゐるといふ事は無謀非常識極まると笑ふ人が多からうと思ふ。それに拘らず退職後依然として今尙車馬喧轟の市中に起居してゐるには相當の理由を有つてゐる。閑靜な田園生活を送つて居る人が偶々來訪すれば表通の物音にビックリする位であり、田舎の泊り客はトラックや自動車の地響きで安眠が出来ぬと言ふ位であるが中風患者の私は年來馴れきつて平氣の平左衛門である。

何程壽命が延びても、悠々自適や山中獨善では私は何う考へても満足が出来ぬ。私にはどうしても老莊の説くやうな仙人式の脱俗は出来ぬ。私は元來極めて貧窮の家に育つて困苦缺乏と戦つて生活の資を求め、素衣素食などは幼時から馴れてゐるから、そんなことは少しも苦にならぬ。私は政府から貰ふ恩給だけで家族の物質生活に困るやうな事は少しもない。かゝる物質上の生活問題は全く別として、私はどうしても無爲徒食する氣になれぬ。私は何んな事があつても生きた社會から離れたくない。私は飽くまで病と戦つて實生活との接觸を絶縁しまいと決心した。而かも過去五年間の經驗は何等私の決心を醸へさす程の事もなければ、無謀を後悔さす事態も生ぜぬ。

よた／＼の中風患者が女子供にまで嘲笑され往來の人に後指をさされる事は勿論本人に取つてあまり愉快な心持ではないが、私は長い間に馴れ子になつて最早それを侮辱とも苦痛とも感ぜぬやうになつた。健康時の知人が病人の知人でないことは百も承知である。在職中の親友が失業者に知らぬ顔をしたり官僚氣質の人が浪人に傲慢な態度を見せびらかすことにも最早馴れ過ぎて却つて其の心事を氣の毒に思ふやうになつた。病人が健康者と同じ待遇を受け無官無職の浪人が在職の高官と對等に取扱はれようなどは固より我が身知らずの非望である。病人の失業者には我が身分にふさはしい人生觀が何時の間にか出来るものである。

かく病氣と苦戦し、境遇と悪闘する中に何時となく元氣を恢復し、思ふ仕事にも堪へるやうになつた。昨今では午前に限つて居た仕事を午後にも續け必要があれば夜にも伸ばし、單獨で汽車旅行は勿論上京も出来るやうになつた。私の寓居の表通の電車、自動車トラックの響には神經衰弱者は耳を掩ふ程であるが私は年來鍛鍊の結果平然として讀書も執筆も出来る。昭和二年末の寄稿を振り出しとして諸種の月刊雜誌に翌三年二十三回、四年に二十四回、五年に二十三回の寄稿をすることが出来た。尚ほ此等を輯録して昭和四年に「丁抹國民高等學校の研究」と「現代教育概觀」の二冊を單行本として公にし、昭和五年には「文化教育原論」を出すことが出来た。其の間に既刊の女子、中學、實業三種の修身書の訂正もやつたので病人生活を相當に有意義ならしめたと思ふ。此等の著述は固より誇つて人に示す程のものではないが、私に出来るだけの最善の努力を盡した事は自己を欺かぬ告白をなし得る。誠に粗末ながら此等の著述の刊行が老病の浪人たる私に許され且つ此の著述を爲すに必要な讀書や思索の機會を與へられたことは全く病氣境遇と悪戦苦闘した賜物であると衷心から感謝してゐる。私が假りに病氣をせず、得意になつて讀書執筆の餘暇のない現職に居据つてゐたか、よし病氣をしても世人や知己が健康在職當時と少しも變らぬ待遇をして呉れたとしたらば、こんなお粗末な著述でも迎も出来なかつたに相違ない。私は病氣や失業は必ずしも我が一

身に取つて災難とばかりは考へぬ。

一旦腦溢血を起した中風患者は宛ら噴火山の上に立つてゐるやうなもので何時内部から爆發するか分らぬ。多くは第二回又は第三回の溢血で死亡する。其の期間は短くて一二年長くて六七年が通例と言はれてゐる。此の常識から言へば私の餘命は今後何程もあるまい。否、通例なれば最早死亡してゐる譯である。併し昨今の私の意識には茲一二年の中に死ぬといふ豫感は少しもない。併し、たとひ奇蹟のやうな長命を夢みてゐても死ぬ時が來れば死ぬことは十分に覺悟してゐる。

私は肉體は死亡しても精神は死滅せぬものと確信し、此の確信に勵まされて病氣と惡戰苦闘を續けてゐる。一日の餘命があればタツタ一日だけでも必ず何か自ら學ぶ道があり、其の學んだ所によつて何か社會の爲に貢獻する道があると確信してゐる。私はかくして更生五年を楽しみ暮し今後の餘生に意義と慰安を求めてゐる。

(昭和五年十一月二十三日稿翌年一月丁酉倫理會丁酉倫理講演集掲載)

四 參考書目

- Adler, Felix:—The moral instruction of children. New York, 1892.
 Mathews, F. H.:—A dialogue on moral education. London, 1898.
 Coit, Stanton:—Ethical democracy. London, 1900.
 Neumann, Henry:—Education of moral growth. New York, 1913.
 Hayward, Frank H.:—The reform of moral and biblical education. London, 1902.
 Coe, G. A.:—Education in religion and morals. Chicago, 1904.
 Sidgwick, Henry:—Practical ethics. London, 1909.
 Sheldon, Walter L.:—An ethical Sunday school. London, 1900.
 Sadler, M. E.:—Moral instruction and training in schools. 2 vols. London, 1908.
 Spiller, G.:—Moral education in eighteen countries. London, 1910.
 Waldegrave, A. J.:—A teacher's handbook of moral lessons. London, 1904.
 Reid, James:—Manual of moral instructions. London, 1908.
 Gould, F. J.:—Youth's noble path. London, 1912.
 Cabot, Ella Lyman:—Ethics for children. New York, 1910.
 Clark, J. K.:—Systematic moral education. New York, 1913.

- Drake, Durant:—The new morality. New York, 1928.
- Harris, P. E.:—Changing conceptions of school discipline. New York, 1929.
- The Chicago Association for child study and parent education:—Building character. Chicago, 1928.
- Fishback, E. H.:—Character building for Junior High School Grades. Boston, 1930.
- Döring:—Handbuch der menschlich-naturalischen Sittenlehre. Stuttgart, 1899.
- Kotzurek, Hugo und Kuppka, Gustav:—Handbuch des Moralunterrichts für Eltern und Lehrer. 2 Aufl. Reichenberg, 1923.
- Foerster, Friedrich Wilhelm:—Jugendlehre. Berlin, 1904.
- „ „:—Lebenskunde. Berlin, 1922.
- „ „:—Lebensführung. Berlin, 1909.
- „ „:—Erziehung und Selbsterziehung. Zürich, 1921.
- „ „:—Sexualethik und Sexualpädagogik. München, 1909.
- „ „:—Schule und Charakter. 14 Aufl. Zürich, 1930.
- „ „:—Weltpolitik und Weltgewissen. München, 1919.
- „ „:—Politische Ethik und Politische Pädagogik. 4 Aufl. München, 1922.
- Jodl, Friedrich:—Geschichte der Ethik. II Bande, 3 Aufl. Stuttgart, 1923.
- „ „:—Vom Lebenswege. Stuttgart, 1916—1917.

- Börner, Wilhelm:—Charakterbildung der Kinder. 2 Aufl. 1923.
- „ „:—Weltliche Seelsorge. Leipzig, 1912.
- Penzig, Rudolf:—Religionskunde u. Lebenskunde in der weltlichen Schule. Frankfurt a, M., 1926.
- Horneffer, August:—Erziehung der modernen Seele. Leipzig, 1908.
- Unold, Johannes:—Aufgaben und Ziele des Menschenlebens. 4 Aufl. Leipzig, 1915.
- Jahn, M.:—Sittlichkeit und Religion. Leipzig, 1910.
- Kluge, Walther:—Moralunterricht und weltliche Schule. Leipzig, 1920.
- „ „:—Sittliche Lebenskunde. Leipzig, 1921.
- „ „:—Ins Herz hinein. 3 Aufl. Leipzig, 1925.
- Barth, Paul:—Lebensführer. Leipzig, 1919.
- „ „:—Ethische Jugendführung. Leipzig, 1919.
- „ „:—Die Notwendigkeit eines systematischen Moralunterrichts. Leipzig, 1920.
- Voigt:—Religionsunterricht oder Moralunterricht? Leipzig, 1907.
- Mockauer, Franz:—Grundlagen des Moralunterrichts. Jena, 1919.
- Brögger, Joseph:—Die Sittliche Erziehung in der weltlichen Schule. Paderborn, 1927.
- Rosenkranz, Wilhelm:—Die Moralpädagogik im heutigen Deutschland. Langensalza, 1919.
- Andresen, Alfred:—Die ethische Erziehung. (Handbuch der Pädagogik Bd. III) Langensalza, 1930.

- Sander, Else:—Lebenskunde. Leipzig, 1916—1922.
- Göckel, Kaiser u. Schmidt:—Bausteine, Lesebuch zur ethischen Unterweisung. 2 Aufl. Leipzig. 1922—1925.
- Leipziger Lehrerverein:—Im Strom des Lebens. Leipzig, 1908—1916.
- Pixberg, H. und Premer, H.:—Handbuch der neuzeitlichen Unterrichtspraxis. Halle, 1929.
- Karstädt, Otto:—Methodische Strömungen der Gegenwart. 14 Aufl. Langensalza, 1926.
- Scharrelmann, Heinrich:—Erlebte Pädagogik. 2 Aufl. Braunschweig und Hamburg, 1922.
- Göttler, J.:—Religions und Moralpädagogik. Münster, 1923.
- Weimer, H.:—Schulzucht. Leipzig, 1919.
- Barth, Paul:—Die Elemente der Erziehungs und Unterrichtslehre. 10 Aufl. Leipzig, 1923.
- Compayré, G.:—Elements d'éducation civique et morale. Paris, 1880.
- Payot, J.:—Cours de morale. Paris, 1909.
- Messer, August:—Das Problem der staatsbürgerlichen Erziehung. Leipzig, 1912.
- Litt, Theodor:—Idee und Wirklichkeit des Staates in der staatsbürgerlichen Erziehung. Leipzig, 1931.
- Scheufgen, H. J.:—Erziehung der Jugend im Geiste der Gemeinschaft und des Staatsbürgertums, Donauwörth, 1925.
- Espe, Haus:—Die Jugend und der neue Staat. Dresden, 1929.
- Krieck, Ernst:—Die deutsche Staatsidee. Jena, 1917.

- :—Der Staat des deutschen Menschen. Berlin, 1927.
- Zentrale für Heimatdienst:—Der Geist der neuen Volksgemeinschaft. Berlin, 1919.
- Koske, P. und Seeling, O.:—Handbuch der Staatsbürgerkunde und der Lebenskunde. Leipzig, 1925.
- :—Staatsbürgerkunde. 9 Aufl. Leipzig, 1930.
- Lampe, F. und Franke, G. H.:—Staatsbürgerliche Erziehung. Breslau, 1924.
- Jahn, M.:—Ethik und Staatsbürgerliche Erziehung. Leipzig, 1914.
- Cohn, Jonas:—Erziehung zur sozialen Gesinnung. Langensalza, 1920.
- Rude, Erwin:—Die neue Schule und ihre Unterrichtslehre. Bd. II. Osterwieck-Harz, 1931.
- :—Staatsbürgerkunde nach grossen Gesichtspunkten. Osterwieck-Harz, 1931.
- Tögel, Karl:—Die staatsbürgerliche Erziehung des deutschen Volkes. Leipzig, 1918.
- Reiniger, Max:—Neue Staatsbürgerkunde. 6 Aufl. Langensalza, 1929.
- Müller, A.:—Der Staatsbürger. 4 Aufl. 1928.
- Homburg, K.:—Staatsbürgerkunde. Osterwieck-Harz, 1925.
- Treuge, M.:—Einführung in die Bürgerkunde. 6 Aufl. Leipzig, 1927.
- Giese, A.:—Deutsche Bürgerkunde. 15 Aufl. Leipzig, 1930.

製本 大津製本所

昭和七年二月十七日印刷
昭和七年二月二十二日發行

修身及公民教育原論
定價金參圓五拾錢

著 者 野 田 義 夫

發 行 者 東 京 市 麴 町 區 富 士 見 町 五 丁 目 九 番 地 辻 本 經 藏

印 刷 者 東 京 府 澁 谷 町 猿 樂 五 十 一 番 地 並 河 三 郎



東 京 市 麴 町 區 富 士 見 町 五 丁 目 九 番 地

發 行 所

電 話 九 段 〇 七 二 七 番
振 替 東 京 五 八 一 八 〇 番

教 育 研 究 會

真 興 社 印 刷 所 印 行
東 京 府 澁 谷 町 猿 樂 五 十 一 番 地

◎ 錄目版出會究研育教 ◎

著者	書名	形態・頁數	定價・送料
文學博士 入澤博士	◎ 教育學要項	菊六八頁	料十二錢
文學博士 吉田熊次著	● 教育學原論	菊四二四頁	料三圓五十錢
文學士 大村桂巖著	◎ 教育學汎論	菊二二頁	料十二錢
文學博士 篠原助市著	● 理論的教育學	菊一八頁	送二十五錢
文學士 林士圓應譯	◎ トバル氏教育學概論	菊九六頁	料四圓八十錢
校閱 篠原助市著	● シュライエルの教育學	菊一八頁	料十八錢
神宮皇學館教授 鶴藤巖太著	◎ 實際教育論	四六判上製 四〇四頁	料十三錢
九州帝大教授 松澤泰巖著	● 國民教育講話	菊四六頁	料十二錢
文學博士 篠原助市著	◎ 教育の本質と教育學	菊四六頁	料三圓五十錢
東京帝大助教授 阿部重孝著	● 學校教育論	菊判總布製 三九二頁	料十三錢

◎ 錄目版出會究研育教 ◎

著者	書名	形態・頁數	定價・送料
文學博士 中島半次郎遺著	◎ 教育の本質	四六判上製 二四六頁	料十二錢
臺北帝大教授 伊藤巖典著	● 教育學の對象と其の方法	二一八頁	料十二錢
小林澄兄序 野瀨寬顯著	◎ 文檢 現今教育目的論及批敘述	四六判上製 一七三頁	料十二錢
成蹊學園教授 野瀨寬顯著	● 文檢 現今教育方法論及批敘述	四六判上製 二二九頁	料十二錢
九州帝大教授 松澤泰巖著	◎ 全我活動の教育	四六判上製 四一六頁	料十三錢
武藏高校教授 山本良吉著	● 訂改新 訓練論	菊三三頁	料十八錢
醫學士 山崎祐久著	◎ 兒童衛生的觀察と 養護の實際	菊一八頁	料四圓五十錢
文學士 吉田熊次著	● ドルトンプランの批判	四六判上製 二四八頁	料十二錢
市丸節著	◎ 自由教育駁論	四六判上製 二三四頁	料十二錢
栗山重著	● 自然科指導の實際	四六判上製 四三二頁	料十二錢

◎ 錄目版出會究研育教 ◎

著者	書名	形態・頁數	定價・送料
陸軍教授文學士 大村 桂 巖 著	◎ 國民教育の根本義	四六判布製 二〇四頁	料一圓二十錢
東京市學校衛生技師 山崎 禎久 著	● 我學校衛生の實際	三六判上製 三二〇頁	料一圓五十錢
ドクトル オフ エコノミクス 市丸 フイロツクイ 著	◎ 經濟教育の理論と實際	四六判上製 一四四頁	料一圓二十錢
教育研究會編	● 勤勞教育の理論と實際	一八二頁	料一圓十二錢
白土 千秋 著	◎ 精勤勞教	四六判上製 二四八頁	料一圓八十錢
傳習館中學校長 小文 山 文 經濟學士 郎 著	● 職業指導と職業教育	四六判上製 四一八頁	料一圓五十錢
醫學博士 高峰 博 著	◎ 職業讀本	三六判上製 三一八頁	料一圓五十錢
東京女子師範教諭 梯 英 雄 著	● 作業主義の教育	四六判布製 五七〇頁	料一圓十八錢
赤司 鷹一 梢 著	◎ 校長學	四六判上製 二九四頁	料一圓三十錢
栃木女子校長 寺内 顯 著	● 行の教育	三六判上製 三一六頁	料一圓五十錢

◎ 錄目版出會究研育教 ◎

著者	書名	形態・頁數	定價・送料
成蹊學園 野瀬 寬 著	◎ 修身指導細案	尋一用 四七二頁	料一圓九十錢
同	● 同	三六判上製 三三六頁	料一圓九十錢
同	◎ 同	三六判上製 三四六頁	料一圓九十錢
同	● 同	三六判上製 三六八頁	料一圓十八錢
同	◎ 同	五六判上製 五六三頁	料一圓八十錢
同	● 同	五七四頁	料一圓八十錢
櫻葉 勇 著	◎ 標準目實演修身例話資料	一二學年 四六判上製 二八五頁	料一圓十八錢
同	● 同	三四學年 四六判上製 二七二頁	料一圓十八錢
同	◎ 同	五六學年 四六判上製 五二〇頁	料一圓五十錢
文學士 淺野 成 俊 著	● 修身教育概說	二九六頁	料一圓五十錢

◎ 教 育 研 究 會 出 版 目 録 ◎

著 者	書 名	形 態・頁 數	定 價・送 料
小豆澤英男共著	◎ 哲 學 概 論	四六判布製 三三八頁	料一圓五十錢 料十二錢
木下 一 雄著	● 知を愛するもの—哲學	四六判美本 二四三頁	料一圓八十錢 料十二錢
日本大學教授 田中 長 男著	◎ 認 識 論 概 說	四六判布製 二八〇頁	料一圓八十錢 料十二錢
文學士 土屋 幸 正著	● 倫 理 學 概 論	菊判上製 二四〇頁	料一圓九十錢 料十八錢
神宮皇學館教授 鶴 藤 巖 多著	◎ 宗 教 學 概 論	菊判布製 三六〇頁	料一圓三十錢 料十八錢
立教大學教授 菅 園 吉著	● 宗 教 哲 學 の 基 礎 概 念	菊判布製 三八六頁	料一圓五十錢 料十八錢
水戸高校教授 大 場 千 秋著	◎ 呪 の 信 仰	一四六判 一九二頁	料一圓二十錢 料十二錢
文學士 平 田 華 藏著	◎ 教 育 者 の た め の 心 理 學	菊判上製 五一六頁	料一圓四十錢 料十八錢
東京帝大助教授博士 淡路 圓 治 郎著	● 職 業 心 理 學	菊判上製 七三〇頁	料一圓五十錢 料十八錢
文學士 本 田 親 二著	● 心 理 學 概 要	菊判上製 二六六頁	料一圓六十錢 料一圓

275
53

終